

事例紹介

学部生指導員の活用によるグループ指導

～ 熊本大学ライティング指導室事例報告 ～

渡邊 淳子 氏

（熊本大学 大学教育機能開発総合研究センター）

こんにちは。熊本大学ライティング指導室の渡邊淳子と申します。きょうはどうぞよろしくお願いいいたします。

本日は、熊本大学ライティング指導室の事例報告といたしまして、学部生指導員の活用によるグループ指導についてお話をさせていただきたいと思っております。

まず指導室の概要を少しお話をさせていただいた後に、グループ指導、学部生指導員についてお話ししていきたいと思っております。

まず、スタッフですが、ライティング統括指導担当の渡邊、私が 1 名と、博士課程の大学院生が 1 名、週 16 時間雇用されております。あと、学部の 2 年生 3 名が各週 3 時間雇用されております。

対象ですが、全学生を対象としております。本学は、ここにありますように、7 学部ありまして、約 1 万人の学生を対象としております。

これはライティング指導室の位置づけをあらわしたものです。

ちょっと見づらい部分もあるかと思っておりますけれども、左の部分に「ベーシック」とあります。これは熊本大学が 1 年生、初年次生に向けてつくっております科目で、8 コマから形成されております。必ず必修で受けるようになっております。約 1,800 人の学生が受講しております。この 8 コマ中の 2 コマをレポート作成の基本（1）、（2）というように、最低でも 1 年生のうちに身につけておいてほしいという基本的なことを教えていくわけです。

そのときに、このコンパクトな 30 ページほどのテキストを使用して授業を行っております。

ベーシックの終了後、ライティング指導室の存在を学生は知るわけです。その後に指導室を訪ねてきて、フォローアップ機関として主に指導室は機能しているという状況です。ここで見た学生たちを見ながら、講義やテキストにまたフィードバックしていくというような形をとっております。

主な指導内容ですけれども、グループ指導と個別指導の 2 つがあります。グループ指導は 1 グループを 4 人から 7 人にして週 1 回程度行っております。個別指導は実数で 15 人から 20 人の学生が週 1 回程度指導を受けているというような状況です。指導室を開設して 2 年たちますけれども、大体、毎年 1,000 人以上の学生が利用しているという状況です。

本指導室はグループ学習を中心に進めております。このグループ学習をなぜ中心にやっているのかということを少しここでお話をさせていただきたいと思っております。

まず、1 つの大きな理由は、先程お話ししましたベーシックの授業を受けた後に、非常にライティングの指導を希望してくる学生が多かったということです。一番多いときは 1 カ月で 150 人の学生が指導を希望してきたというようなこともありました。スタッフ数は非常に少ないので、ちょっとそれでは対応し切れないというようなことが起きてしまったわけです。

開設当初は個別指導を重点的にやっていたんですけれども、どうしても学生側に依存性が増してきたというようなことが見られました。毎回毎回、課題を出すために指導室に持ってこない、レポートを提出できないだとか、あるいは不完全な原稿を持ち込んで、丸投げですね。いわゆる便利屋扱いで指導室を利用する学生がかなり多くなったということがありました。

また、対話による気づきの学習というのを、目標にやってきましたけれども、どうしても 1 年生が多いというところで、やっぱり恥ずかしかつ

たり、遠慮したりで、ちょっと消極的だったわけです。ですから、結果として指導者側からの一方的なアドバイスというような形になってしまったということが起きてしまいました。そこで、思い切ってグループでやってみようかということで、グループを中心にやり始めたということです。

ここにありますがグループ指導の流れです。まず、マナー指導から始めまして、課題提示、資料検索、レジュメ作成、そして発表、ディスカッション、文章作成（2,000字から1万字程度）というふうな文章を最終的に作成していきます。

マナー指導ですけれども、これは、個人指導の場合も、グループ指導の場合も、本指導室では必ずやっていることです。1コマ使ってやっております。内容は、非常にお恥ずかしいお話なんですけれども、メールの送り方すら知らないで指導室を訪ねてくるわけです。ですから、メールの送り方、あるいは時間のことについてもかなり話をしております。守れなかった場合には、必ず事前に連絡を入れましょうとか、挨拶をしましょうといったごくごく、こんなことまで教えなければならぬのかというようなことを最初の段階でやるようにしています。しかし、これは思った以上に効果を上げております。最初の段階でマナー指導をしておくことで、その後の作業がスムーズに進んでいるというふうに感じております。なかなか、途中気づいても、そういうマナー的なことは言いづらいものですから、やっぱり最初にしてよかったなというふうに感じております。

その後に「課題提示」とありますがけれども、これも本指導室の特徴だと思っております。本指導室は学生が持ち込んだ文章は一切見ておりません。特に単位にかかわるレポート、学位にかかわる論文は、今のところ、指導の対象にはしておりません。全て指導室が用意したテーマに沿って資料検索、レジュメ作成、レジュメをつくっていきます。そして、そのレジュメをつくったら、グループの

メンバーにレジュメを配って、一人ずつレジュメ発表をしていきます。そして、その後に、みんなでディスカッションという形をとっております。このときにファシリテーター役として入ってきますのが、先程スタッフのところで紹介しました2年生の学部の指導員が入ってくるわけです。ここで資料検索、レジュメ発表、ディスカッションということを数回繰り返して、材料がある程度整ったところで文章作成をしていくという流れを踏んでおります。2,000字から1万字というのは、グループによって目指す文章の分量がちょっと違ってくるといえます。

書く力をしっかりつけてあげたいというのが私どもの一番の願いです。この書く力を本指導室はトレーニングしていく場だというふうに考えております。グループディスカッションをやったり、資料検索、レジュメ発表、そういったことを何回も何回も繰り返して訓練をしていく場所であるということです。それをやっていくうちに、本来は書くことを目指しているんですけれども、聞くこと、読むこと、考える、話すことも同時に身につけていくというわけです。そこにマナー教育を入れてあげることで、これらの力をフォーマルな形で身につけることができます。

これらのことが身につけてきますと、自然と自発性というものが学生の中に見られるようになってきます。これはどういったことかといいますと、例えばレジュメ作成、これに一番最初に自発性が見られるわけです。最初、2回目ぐらいまでは私たちが指導したとおりのレジュメを学生たちはつくってまいります。これぐらい言えばいいかなということをそこそこに発表していくということが二、三回続くんですけれども、回を重ねていくと、そこに学部の指導員も入って、いろんな指導員も発表していきますので、やっぱりそれに刺激を受けていくわけです。すると、1人、2人と、レジュメに工夫が見られるようになってきます。

例えば図表を入れ込んだりだとか、他のみんなが読んでいないような資料を持ってきて添付したりだとか、そういったものをセッション中に持ってくるわけです。それをほかのメンバーも見ると、やっぱり自分もそういうふうにやってみたいな、もっと伝わるように工夫してみたいと思うわけです。この自発性が出てくると、レジュメを一生懸命つくろうと。そうなってくると、やっぱりしっかり読まなきゃ、いいレジュメはつくれないわけです。読んで、そして試行錯誤して考えていくわけです。こうやって何回も何回も同じテーマでグループで頑張っておりますので、テーマについてアンテナをいっぱい張っているわけです。ですから、ほかの講義で聞いたことなども、もしかしたら、これは自分たちがやっていることにかかわるかもしれないと思って、ほかの講義で配られた資料などをメンバーにコピーして配ったりとか、そういった一歩、二歩踏み込んだような一工夫、二工夫が見られるようになるわけです。

自発性が見られたときに、もう一度、レポート作成の基本、最初 2 コマでやったテキストの内容を学生の中に入れてあげますと、すきっと、なるほどという形で頭に入れることができるわけです。こうなってきますと、書く力は生き抜く力へと変わっていきます。ライティング指導室スタッフ一同、「書く力は生き抜く力」を合い言葉に日々頑張っております。指導室で訓練したことがベースに整って、生き抜く力まで変わっていくと、その後は学部に戻って、レポートや論文を書くことができるようになります。就職活動のときのエントリーシート、面接などにも活用できる底力となります。あるいは、社会に出てから、プレゼンテーション、報告書、企画書といったところの底力にも変わっていくというふうに考えております。

ここで学部生指導員の選抜の流れを少し説明させていただきます。

ベーシック（レポートの作成の基本）、これは、

先程ご説明しましたように、全部の学生が受けております。それを受けましたら、特別コース（一般）、これが指導室でやっておりますグループ指導のことで、これを前期に受けていきます。そして、その中から指導員になりたいという学生は後期に特別コース（論文作成講座）というのを 15 コマ受けるようになっております。それを受けながら、1 万字の論文を作成していきます。そして、それを提出して、審査の結果、合格して指導員になれるという流れを踏んでおります。

最後に、学部生指導員導入の効果を少しお話させていただきます。

私はよく学生に、文章を書く訓練というのは、スポーツで言うならば、筋トレと同じだねという話をします。筋トレのようなものですから、非常に単調で、ある意味、自分との闘いのような作業です。毎日毎日、読んで書いてというような、ちょっと怠けてしまったら、また力はもとに戻ってしまうというような、そういったことをやっていかなければならない部分が大いいわけです。それをグループで、みんなで一緒にやりながら、そこに学部の指導員、自分たちより 1 年か 2 年先輩が入ってくるわけです。すると、指導室で 1 年、自分たちより訓練した指導員が何とすごい発表力、いろんな物の考え方の視点をたくさん持っている。プレゼンテーションもやっぱりすばらしいわけです。そういったものを見ると、学生たちはやっぱり彼らの存在は輝いて見えるわけです。実際、私から見ても、本当にきらきらと輝いていると思います。

そうなる、学生たちは指導員を目標にし始めます。自分もああいうふうになりたい、だって、自分たちより 1 年、2 年、頑張っただけで、あれだけのことができるんだというふうに身近に感じるわけです。そうなってくると、やる気というのも持続させることができるということです。やはり学部生の指導員を入れて一番大きかったことは

シンポジウム議事録

シンポジウム「ライティングセンター 日本の現状と課題」

平成 25 年 3 月 16 日（土）13：00～17：30

学生の目標になっているということではないかと
私自身感じております。

あとは 2 年生から指導員として指導室で機能し
ておりますので、彼らの中に大学院に進む学生が
出てきますと、かなり長期的に指導室で機能でき
る可能性もあるかということがメリットの一つで
はないかと考えております。

以上で終わらせていただきます。どうもご清聴
ありがとうございました。